



復刻



近畿双松会設立 50 周年記念会報の発刊にあたり、私たち後輩は草創の頃の歴史、先人の思いを知るべきと考え、過去の会報から米村又男様（中 34 期）、横山春樹様（中 55 期）、岩成哲男様（高 9 期）の寄稿 3 編を復刻させていただきました。

近畿双松会沿革史略

（S59 年 8 月稿）

米村又男（中 34 期）

●緒言

我等の母校たる旧制（以下略す）島根県立松江中学校が、終戦後の学制改革により消えてしまい、その後継校として、新制（以下略す）松江高等学校及び松江北高等学校が衣鉢を継ぐことに定まって既に久しいが、この近畿地方には古くから松江中学同窓の近畿双松会があり、一方後継校側には、松高及び松江北高同窓会があって、その統合問題は多年に亘る懸案ながら容易に解決を見ずに今日に至った。

筆者は曩むかしに昭和 53 年度会報に“双松会一元論”を提唱したが、事情は爾しかく簡単なものでなく、無力に終わったので、昨年再び筆を起して“近畿双松会の過現未”と題し、従来の合併論を棄て、現在のわが近畿双松会を永遠に存続し、松高及び北高出身者で、松江中学の後継者たることを自認する青年諸氏のみを迎え入れて、双松会の永遠の存続を計ってはと提言したのであったが、会の役員会でも全く同感であり、総会に於て其の様に会則の変更が決議されて、多年の暗雲が一挙に解決を見たのは誠に幸いであり、欣びにたえない所である。

今回、内田事務局長から、序に本会の沿革について書くように要請があり、最後のご奉公に、思い出すまゝを書き綴る次第である。

●第一部 創世期（過去）

明治の末年頃からか、大阪に社団法人島根県友会と云うのがあった。これが終戦後の昭和 38

年に解散したあと、代って現在の島根県人会が生れたのであるが、会の性格は大分違っていた。前者島根県友会が敢て社団法人を名乗っていたのは、会に将来会館を建設すべく基本金を積み立て、いたからであるが、戦後貨幣価値の大変動で従来の積立金など役に立たなくなったので、之れを処分して解散せられたのであった。

前記社団法人島根県友会は、県出身の医師、法曹家、実業家、公務員、会社員等の有志から成り立ち、毎年 1、2 回総会を開き、歓談共励を目的とする友誼団体であった。初代の理事長は医師の原田智夫氏で、筆者は大正 12 年春、京阪電鉄に入社後間もなく兄に紹介され入会したのであった。後年、原田理事長ご逝去により二代目理事長に、我等の大先輩四方田保先生（中 20 期）が推挙せられた。

四方田保先生は京大法科卒業後、直ちに弁護士になられた生粋の弁護士で、当時既に刑事々件専門の弁護士として令名きくま噴々、大物事件には殆ど干与せられ、巷間よく「東の花井（卓造）、西の四方田」と天下に並び称せられる一時期をつくられていたものである。また早逝せられた前夫人は女子大出の才媛で、当時関西社交界にても活躍せられていた。筆者は兄が四方田先生と若い頃からの友人であった関係で、早くからお世話を頂いていた。

閑話休題、前記県友会の会員数は当時百数十名あったと思うが、毎年の総会は、曾根崎新地の静観楼（今は無し）で催されるのが常例で、毎回 60～70 名の出席があったように思う。その中に松江中学出身者が相当居られたので、四方田先生が松中卒業生会を催そうと主唱せられた。

はっきりした日時は思い出せないが、大正の末頃か昭和の初頭、県友会の会員以外にも判る

範囲に檄を飛ばして、第1回卒業生会をある日曜日の午後、当時四方田先生が箕面に新築せられたばかりの豪壮な邸宅で開催せられた。出席者20余名だったかと思うが、わざわざ松江から取り寄せられた赤貝の殻蒸し、もずくの酢の物、割子蕎麦等にて歓を尽くした。そして会名を「近畿双松会」と命名され、会長に四方田先生を推戴した。これが本会の嚆矢である。

その後、毎年1、2回集会が催されたが、会場には其の頃梅田新道にあった三島亭、本むさし、稀れには太融寺会館とか、先生が青年練成に特別の後援をせられていた福島の清風寺会館で催されたりした。その頃恩師の方でご出席頂いたのはプール学院（大阪生野区）の教頭、溝辺庄一先生だけで淋しかった。溝辺先生は松江中学では体育の先生で、筆者も棍棒体操や瑞典式体操と云った新しいものを教わった記憶がある。殆ど毎回ご出席になった先生は実にお楽しげであった。

当時、会の首脳陣には、四方田会長を輔けて三隅晋氏（23期・弁護士）、先生の次弟四方田貞氏（27期・特許弁理士）、末弟四方田登氏（31期・弁護士）が居られたが、主として事務を掌って居られたのは藤野浩平氏（28期・弁護士）、田中金次郎氏（27期相当・中途転、会社員）のお二人であった。

会は次第に発展し、会員も徐々に殖えて来ていたが、やがて日支事変につゞく大東亜戦争（太平洋戦争）が酣になって集会も途絶え勝ちとなり、会員の身边にも異動離散があって、会も中断の止むなきに至った。つまり自然休会の状態に立ち到ったのであった。

●第二部 復興期（現在）

戦後10年位立って世情漸く落付きを見せるようになってから、四方田会長は双松会の復興を号令せられ、堂島ビルに事務所を持たれていた先生は、同じビルに事務所を持つ国連社々長の飯塚隆久氏（49期）や近くに会社を持っていた坂本幸三氏（42期）に呼びかけられ、会員名簿の整理をさせられた。

次いで、永岡孝二氏（42期）に会の復興の特命があった。先生と永岡さんとは昔から家の付き合いのある間柄で、当時永岡さんは近畿日本鉄道の専務（程なく副社長）であったが、極めてご多忙の中を衆望を担われて音頭をとられ、会の復活再発足を計られたのであった。

そして総ての準備が整って昭和33年10月25日、堂島ビル内の清交社に於て、盛大な創立総会が催され、第二次近畿双松会の新発足を見、四方田先生は名誉会長に、永岡さんが会長に選任せられた。

復興発会に至るまでの準備万端及び其の後の運営についてのご労苦は蓋し大変だったろうと思えるが、今は亡き前掲の飯塚隆久（49期）、古木政次郎（51期）、井上澄（46期）の三氏並びに松本周二郎（49期）、更に続いて内田禮治郎（49期）、横山春樹（55期）の各氏と、その他大勢の方々が献身的に会長にご協力になったのが今日の隆盛の基礎をなしたものであること疑いなく、その裡に永岡会長の円満周到なご指導があったればこそであることは言を俟たない。

追って四方田名誉会長は、昭和39年3月20日にご永眠になり、同25日に前掲清風寺に於て盛大な教団葬が執り行われたが、真に「巨星墜つ」の感を深くした。

永岡会長時代には、会員の拡張、会誌の発行等あらゆる会の基礎作りによくお努め頂いたのであるが、故田中収氏（49期・三和銀行常務）が副会長として、また横山さんが常任幹事として会長と一体になり、会の発展に尽された功績は実に甚大なものであった。

やがて昭和43年12月7日には、本会復興満10周年記念総会が太閤園に於て大々的に催され、出席者120余名と云う盛大な祝典となった。開宴の前に、前庭に階を設けて記念撮影を行われたりもした。

その後永岡会長は昭和53年10月が本会復興後満20年に相当し、恰も母校松江中学の創立百周年に相当するのを機とし、辞任せられる事になったので、後任には衆望を担われて山根誠

さん(46期)が選任され、永岡さんは名誉会長に推薦せられた。

また同時期に、20年の長年月間、本会の発展のため献身的に^{じんすい}尽瘁された事務局担当の常任幹事の横山春樹氏(55期)が会社の都合から退任の申出があり、後任難を来したのであったが、内田禮治郎氏(49期)が犠牲的に進んで引き受けられ、松本副会長と共に山根新会長を輔けて今日に及んでいる事は誠に有り難い極みである。会員の増募、会誌の充実刷新、また会員懇親の場をと新に家族同伴の行楽会行事を催されるなど、新機軸を次々出されて来た。更にまた永年の懸案、後継校たる松江高校及び松江北高関係同窓会との合併問題について山根会長、松本副会長と共に最も労苦を重ねて来られたのは周知の通りである。

去る昭和58年11月24日、本会の復興満25年記念大会を日本橋の「とり菊」平和殿に於て催され、大盛会であったのは会員各位の記憶に新しい所であろう。

●結語

本会は現在、山根会長、松本・横山・和田の三副会長の下に、内田・石倉の正副事務局長が熱心に運営に当られ、極めて好調な発展を続けつゝあり、多年の懸案の合併問題も今やすっきりと解決して、わが近畿双松会は此のまゝ永遠に存続することになった。今後われらが母校松江中学の衣鉢を継がれた松江高校及び松江北高関係の卒業生の有縁の士が自ら奮って参加入会され、赤山の学舎に育ち、双松樹下に質実剛健の精神を鍛え込まれた共通の思い出を抱く者同士が、日常職務の上のみならず、家庭的にも温かい交遊を楽しみ、益々相互信頼の絆を太いものとしてゆくであろう。また恩師諸先生を迎えて同窓が昔に還る交歓共励の会は永遠に続き栄えゆくことであろう。弥^{いやさか}栄を祈って筆を擱^おくものである。